

Asian Journal of
**HUMAN
SERVICES**

Printed 2014.1030 ISSN2186-3350

Published by Asian Society of Human Services

*O*ctober 2014
VOL. **7**



Asian Society of Human Services

SHORT PAPER

特別支援教育成果評価尺度 (SNEAT) の開発

韓 昌完¹⁾ 小原 愛子²⁾³⁾ 上月 正博²⁾

- 1) 琉球大学教育学部
- 2) 東北大学大学院医学系研究科
- 3) 日本学術振興会特別研究員

<Key-words>

特別支援教育, 教育評価, 特別支援教育成果評価尺度, 尺度開発

hancw917@gmail.com (韓 昌完)

Asian J Human Services, 2014, 7:125-134. © 2014 Asian Society of Human Services

I. 研究背景

2011年、中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会において、「児童生徒の学習評価の在り方について(報告)」(以下、「報告」とする。)が取りまとめられ、その中で、学習評価の重要性及び評価規準・評価方法の研究開発の推進を行うことを示した。学習評価とは、学校における教育活動に関し、子どもたちの学習状況を評価するものである(中教審, 2011)。教育分野においてのアウトカムの多くは学力測定を用いてきたが、特別支援学校において学力をアウトカム指標として用いるのは困難な点が多く、自立活動の目標達成等をアウトカム指標としてきた(小原ら, 2014)。しかし、野崎・川住(2012)が特別支援教育教員に行った調査によると、「学習評価」「実践評価」のいずれについても、6割以上の担当教員が困難さを感じている傾向にあることが明らかとなった。また、特別支援教育において妥当性の検証を行い、科学的に開発された教育成果評価尺度はほとんど見当たらない現状である。

そこで、特別支援教育の教育成果を評価する尺度の開発に至った。小原ら(2014)は、①特別支援教育の対象となる児童生徒のQOL向上が課題となっていること、②教育成果の評価には子どものQOLの視点になった評価尺度が必要であること、の2点を鑑み、教育成果を評価する尺度に健康関連QOL(以下、HRQOL)を用いる可能性について検証した。その結果、HRQOLの「体の痛み」以外の7領域はそれぞれ対応しており、自立活動とHRQOLは関係性があることが明らかになり、特別支援教育における教育成果評価尺度を開発するにあたって、HRQOLを取り入れた尺度開発の可能性があることが示唆された。

本稿では、それらの結果をもとに、特別支援教育の教育成果を測定する尺度開発におけるこれまでの開発過程について報告する。尺度については、特別支援教育成果測定尺度(Special Needs Education Assessment Tool)と名付け、以下、SNEATとする。

Received
August 16, 2014

Accepted
September 27, 2014

Published
October 30, 2014

II. SNEAT について

1. 構造と特徴

SNEAT は、主に自立活動の授業成果を評価する尺度である。SNEAT の質問項目は、体の健康、心の健康、社会生活機能の 3 領域 11 項目から構成されている (図 1)。これら 11 項目は、児童生徒の教育達成度に合わせ授業担当教員が 1~5 で段階的に評価し、5 が最も良い評価である。授業に参加する児童生徒が 1 名の場合は、その児童生徒の変化に基づいて授業の評価を行い、複数名の場合は、全体の平均的な変化に基づいて授業の評価を行うものである。SNEAT が評価する授業の対象児童生徒は、以下の条件を満たせば障害種を問わず使用することができる。

- ① なんらかの意思表示ができるレベルの児童生徒
- ② 姿勢と運動・動作が一時的でも改善する可能性のある児童生徒

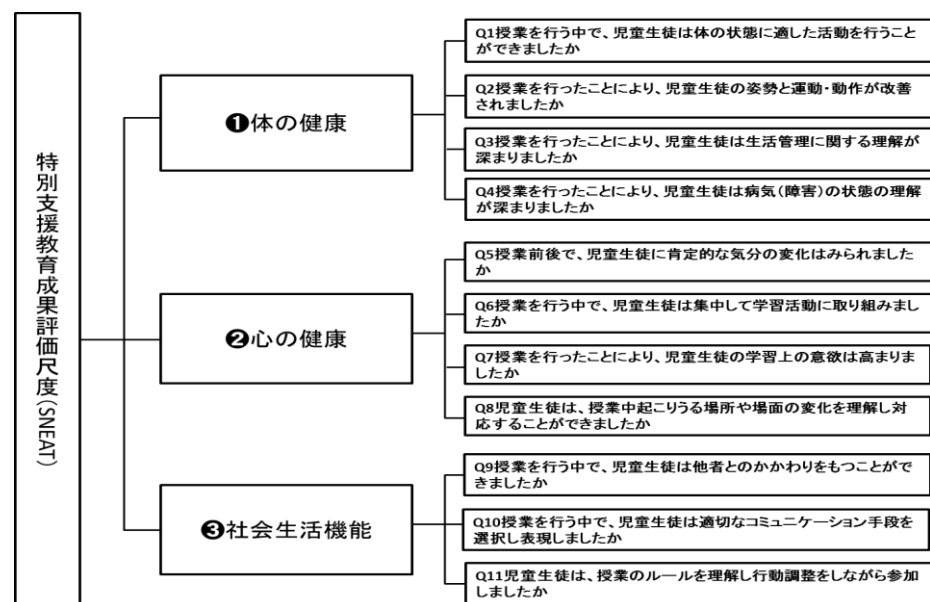


図1 SNEAT の構造

SNEAT は、自立活動の内容に QOL の概念を加え、児童生徒の QOL 向上の視点から教育成果を評価できる新しい尺度である。近年、特別支援教育では QOL の向上が求められていること、自立活動では ICF の概念を取り入れられていることを踏まえ、SNEAT の各項目には、QOL や ICF の概念を取り入れた (表 1)。

表1 SNEATの項目に含まれる概念

領域	SNEATの各項目	自立活動	ICF	QOL
体の健康	Q1 授業を行う中で、児童生徒は体の状態に適した活動を行うことができましたか	健康の保持 身体の動き	心身機能 身体構造 健康状態	身体機能
	Q2 授業を行ったことにより、児童生徒の姿勢と運動・動作が改善されましたか	身体の動き	心身機能 身体構造 活動	身体機能
	Q3 授業を行ったことにより、児童生徒の生活管理に関する理解が深まりましたか	健康の保持	心身機能 身体構造 健康状態	全体的健康感
	Q4 授業を行ったことにより、児童生徒の病気(障害)の状態の理解が深まりましたか	健康の保持	心身機能 身体構造	全体的健康感
心の健康	Q5 授業前後で、児童生徒に肯定的な気分の変化はみられましたか	心理的な安定	心身機能	心の健康
	Q6 授業を行う中で、児童生徒は集中して学習活動に取り組みましたか	心理的な安定	活動	日常生活機能(精神)
	Q7 授業を行ったことにより、児童生徒の学習上の意欲は高まりましたか	心理的な安定	活動	活力
	Q8 児童生徒は、授業中起こりうる場所や場面の変化を理解し対応することができましたか	心理的安定 環境の把握	活動 参加	心の健康
社会生活機能	Q9 授業を行う中で、児童生徒は他者とのかかわりをもつことができましたか	人間関係の形成	活動 参加	社会生活機能
	Q10 授業を行う中で、児童生徒は適切なコミュニケーション手段を選択し表現しましたか	コミュニケーション 環境の把握	活動 参加	社会生活機能
	Q11 児童生徒は、授業のルールを理解し行動調整をしながら参加しましたか	人間関係の形成 コミュニケーション 環境の把握	活動 参加	社会生活機能

2. 領域の設定

概念や価値観が共通している部分のクロス分析をして授業評価としてふさわしいものを抽出した

領域の設定では、自立活動とQOL(HRQOLと子どものQOL)、ICFに共通した概念であり、さらに自立活動の授業評価を行う上でふさわしいとされる領域を設定した。SNEATの領域は、「体の健康」、「心の健康」、「社会生活機能」の3領域である。「体の健康」とは、身体機能や身体の動き、健康の保持を含む体の健康に関する領域である。また、「心の健康」とは、心理的な安定や活力を含む心の健康に関する領域である。「社会生活機能」とは、人間関

係の形成やコミュニケーション、活動や参加等を含む社会生活機能に関する領域である。

3. 項目の定義

(1) 体の健康

「Q1 授業で行った活動は、児童生徒の体の状態に適した活動を行うことができましたか」とは、児童生徒が自身の体の状態（体温、体力、痛み等を含む体調）に対して適度に活動を行ったかということである。

「Q2 児童生徒の姿勢と運動・動作が改善されましたか」とは、児童生徒が日常生活の基本となる姿勢保持や運動・動作に改善が見られたかということである。

「Q3 児童生徒は生活管理に関する理解が深まりましたか」とは、児童生徒が生活リズム、食事、排泄、服薬、着替え、休憩等を含む日常生活の管理に関する理解が深まったかということである。

「Q4 児童生徒は病気（障害）の理解が深まりましたか」とは、児童生徒の学習上・生活上の病気（障害）の特徴や、病気（障害）による制限に関する理解が深まったかということである。

(2) 心の健康

「Q5 児童生徒に肯定的な気分の変化はみられましたか」とは、授業中児童生徒が笑顔、「快」の状態、リラックスした表情等から読み取れる気分の変化がみられたかということである。

「Q6 児童生徒は集中して学習活動に取り組みましたか」とは、児童生徒が授業中に学習内容に対して注意しながら活動に取り組んでいたかということである。

「Q7 児童生徒の学習上の意欲は高まりましたか」とは、児童生徒が新しいことを知る楽しさ、課題に対する達成感、「またやりたい」という期待感の表出から読み取れるやる気がみられたかということである。

「Q8 児童生徒は、授業中起こりうる場所や場面の变化を理解し対応しましたか」とは、児童生徒が、授業内容の変化、教室の変更、友人の不在等、授業中に起こりうるあらゆる場所や場面の变化に対して対応したかということである。

(3) 社会生活機能

「Q9 児童生徒は、授業中、他者とのかかわりをもちましたか」とは、児童生徒が授業中、子ども同士、教師等、授業に関わった全ての人とかかわりをもったかということである。

「Q10 児童生徒は、授業中、適切なコミュニケーション手段を選択し表現しましたか」とは、児童生徒が言語や各種の文字や記号、機器等を含む全ての言語的・非言語的手段を適切に選択し表現（活用）したかということである。

「Q11 児童生徒は、授業のルールを理解し行動調整をしながら参加しましたか」とは、児童生徒が、授業でのルールを理解し、席を離れない、私語をしない、指示に従う等に加え、教師が設定した授業のルールに沿った行動しながら授業に参加したかということである。

4. 採点方法

教育現場で活用しやすいよう合計 100 点に設定した。各領域の合計点数をみると、「体の健康」が Q1 のみ 5=5 点、4=4 点、3=3 点、2=2 点、1=1 点とし、Q2~Q4 は 5=10 点、4=8 点、3=6 点、2=4 点、1=2 点とし、領域合計 35 点とした。「心の健康」は、Q5 のみ 5=5 点、4=4 点、3=3 点、2=2 点、1=1 点とし、Q6~Q8 は 5=10 点、4=8 点、3=6 点、2=4 点、1=2 点とし、領域合計 35 点とした。「社会生活機能」の Q9~Q11 は、5=10 点、4=8 点、3=6 点、2=4 点、1=2 点とした。各領域は、授業目標の達成難易度の低い項目から順に並べている。合計 100 点にするため、「体の健康」と「心の健康」で最も達成難易度の低い Q1 と Q5 は重み付けを低くした。

ただし、各項目の重み付けに関しては、構成概念妥当性の因子分析後、再度行うこととする。

5. SNEAT の活用可能性

(1) 教師自身が評価することが可能

SNEAT は科学的手法（妥当性の検証）を用いて開発する尺度であるため、教師自身が評価を行っても評価点数に個人差が現れにくい尺度である。また、評価は授業を受けた児童生徒の状態の変化に基づいて行うため、児童生徒の教育成果及び担当教師の授業評価を同時に行うことができる。

(2) 指導案の評価欄として使用可能

現在の指導案の評価欄に、そのまま SNEAT が活用可能であり、授業改善のための指標として活用できる（図 2）。

(3) 1 回限りの教育実践でも、一定期間行う教育実践でも評価することが可能

授業評価として用いる際、1 回限りの教育実践でも、一定期間行う教育実践、あるいは単元毎の教育実践でも評価することが可能である。一定期間あるいは単元毎等の継続的な授業評価の場合は、1 年間の推移をみる事ができる。

(4) 領域別評価を行うことで、児童生徒の特性に合った目標設定の手助けとなる事が可能

SNEAT は、「体の健康」、「心の健康」、「社会生活機能」の 3 領域で構成されているため、得点が低い領域に関する子どもの特性や、教育実践の課題等を領域毎に見ることができる。そのため、児童生徒の特性に合った目標の設定や授業設定が可能となる。

○○の指導案

1. 児童生徒の実態

2. 指導目標

3. 授業の展開

1 ----	-----	-----
2 -----	-----	-----
3 -----	-----	-----

4. 評価

Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT)
特別支援教育成果測定尺度

◎下の ◎～◎の付録欄について、最もふさわしいと思われる番号 (1～5) を記入してください。複数記入は評価結果として、最もふさわしい番号を評価してください。
◎付録の注までを参照してください。
◎付録の注の番号を記入し、回答結果を印刷してご利用ください。結果判定については下記を参照してください。

合計点数◎●◎●◎ /100

◎付録の注	5	4	3	2	1
◎1 授業を行う中で、児童生徒の特性に合った活動を行うことができましたか	5	4	3	2	1
◎2 授業を行ったことにより、児童生徒の関心・意欲が向上されましたか	5	4	3	2	1
◎3 授業を行ったことにより、児童生徒の生活習慣に関する理解が深まりましたか	5	4	3	2	1
◎4 授業を行ったことにより、児童生徒の関心・意欲の理解が深まりましたか	5	4	3	2	1

図 2 SNEAT を活用した指導案例

(5) 「個別の教育支援計画」「個別の指導計画」等の目標を立てる際に活用可能

支援目標・指導目標が SNEAT のどの領域・どの項目に該当するかによって、SNEAT の領域・項目を参考に具体的な支援目標や指導目標を決定する手助けとなる。すなわち、目標を立てる際の一定の指標となることが期待される。

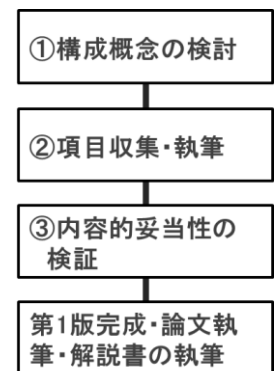
(6) 日本全国で SNEAT を活用することが可能

SNEAT は、科学的手法を用いて開発する尺度であるため、授業評価の一定指標として日本全国で活用されることが期待される。全国で使用されると、SNEAT を使用した授業実践例等を検索できるようになる可能性も期待される。

III. SNEAT の開発過程

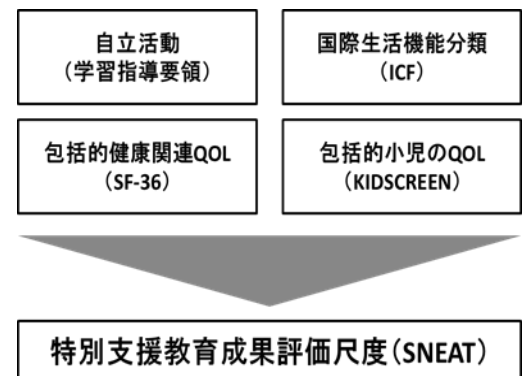
1. 開発手順

SNEAT の尺度開発は図 3 の過程で行う。構成概念の検討及び項目収集は、研究者間での協議によって行い、SNEAT の試案を作成する。その後、SNEAT 試案の構成や内容について、県教育研究機関の教員や現職教員に説明し、内容的妥当性の検証を行う。内容的妥当性については、より現場で使用しやすい尺度にするために、面接による意見調査と質問紙調査の 2 回実施する。それらの結果を基に、SNEAT 第一版を完成させる流れである。



2. 構成概念の決定と項目収集

SNEAT の構成概念の決定と項目収集は、小原・韓ら (2014) の結果をもとに研究者間で協議を行い決定した。ここでは、SNEAT に含まれている概念が自立活動と HRQOL の概念だけでは、現場教員には理解しづらいという意見もあり、自立活動に含まれる ICF の視点及び小児の包括的 QOL を測定する KIDSCREEN の領域や項目も検討しながら、SNEAT の構成概念の決定及び項目収集を行った (図 4)。この協議により完成した質問紙を SNEAT 試案 Ver.1 とした。



3. 内容的妥当性の検証

(1) 内容的妥当性の検証 I (面接形式による意見調査)

内容的妥当性の検証 I は、特別支援教育の専門家 4 名、県教育研究機関の教員 6 名に対する面接形式による意見調査を行った。教育研究機関の教員は、全員が特別支援教育免許を保有しており、特別支援学校通算教職経験年数が 13 年以上であり、中には管理職経験者も含まれていた。特別支援教育成果を評価する上で、領域及び項目が妥当であるかについて尋ね、項目の内容や言葉の表記に関する意見を自由に述べてもらった。

(2) 内容的妥当性の検証Ⅱ (質問紙調査)

内容的妥当性の検証Ⅱは、沖縄県内の特別支援学校の学部主事 23 名および沖縄県教育委員会免許法認定講習参加者の教員 66 名に対する専門家調査を行った。SNEAT の構造について 5 段階評価で尋ね、各領域の構造の妥当性について 5 段階評価で尋ねた。その結果、90% 以上の教員が SNEAT の構成及び内容が妥当であると回答した。このことから、SNEAT 全体の構造及び、各領域の構造に関する妥当性が確認された。また、項目の内容や言葉の表記に関する意見についても自由記述してもらった。

4. SNEAT 第 1 版の完成

内容的妥当性の検証の結果をもとに、特別支援教育の研究者、QOL の研究者、県教育研究機関の教員の協議により、SNEAT 試案の修正が行われた。修正箇所としては、質問紙の配置に関する構成や対象の明確化、評価段階の基準設定、言葉の表記の明確化等があった (表 2)。また、完成した SNEAT 第 1 版は、表 3 の通りである。

表 2 SNEAT 試案 Ver.2 の内容及び言葉の表記に関する専門家調査結果

指摘内容	修正前 (Ver.2)	修正後
全ての内容について、どのレベルのどの障害を想定しているのか理解が難しい。知的障害、肢体不自由、盲、聾等、障害は、多種・多様化する中、それを統一して測定するのは難しいと思います。	SNEAT に表記なし	SNEAT の説明文に以下を追加 「SNEAT が評価する授業の対象児童生徒は、以下の条件を満たせば障害種を問わず使用することができます。 1. なんらかの意思表示ができるレベルの児童生徒 2. 姿勢と運動・動作が一時的でも改善する可能性のある児童生徒」
「理解」は教師側の理解と解釈していいのですか？それとも子どもが理解したということですか？	「Q3 授業を行ったことにより、児童生徒の生活管理に関する理解が深まりましたか」 「Q4 授業を行ったことにより、児童生徒の病気 (障害) の状態の理解が深まりましたか」	「Q3 授業を行ったことにより、児童生徒は生活管理に関する理解が深まりましたか」 「Q4 授業を行ったことにより、児童生徒は病気 (障害) の状態の理解が深まりましたか」
各項目を 5 段階で評定することになっていますが、5 段階の判断基準があると良いと思います。	SNEAT に表記なし	11 項目すべてに該当する言葉として 5=「非常に」、4=「かなり」、3=「多少は」、2=「少しだけ」、1=「ほとんどない」と表記。ここでは、WHOQOL26 の表記を参考した。
各項目の注釈を読みながら進めましたが、注釈の内容を各項目に盛り込むと、より具体的に評価ができるのかと思いました。	注釈は、質問用紙の下部にまとめて表記	項目中に注釈を併記
「授業を行う中で」といった授業中での子どもの様子を探る質問と、「授業を行ったことにより」といった授業後の子どもの様子 (授業の成果) を探る質問があり、回答に戸惑うと思います。	Q1、Q6、Q9、Q10 は「授業を行う中で、～」と授業中の子どもの様子を探る質問項目で、Q2、Q3、Q4、Q7 は「授業を行ったことにより、～」Q5 は「授業前後で、～」と授業後の子どもの様子を探る質問項目	Q1 は「授業で行った内容は～」Q2～Q11 は「児童生徒は～」という文頭にすることで、回答に戸惑うことがないようにした。

表3 特別支援教育成果評価尺度第1版

Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT)						
特別支援教育成果評価尺度						
①この尺度は、授業を行った教員が自身の教育成果を測定（授業評価）するための尺度です。授業に参加する児童生徒が1名の場合は、その児童生徒の変化に基づいて授業の評価を行い、複数名の場合は、全体の平均的な変化に基づいて授業の評価を行ってください。						
②下のQ1～Q11の各項目について、最もふさわしいと思われる番号1～5を丸（○）で囲んでください。						
③SNEATが評価する授業の対象児童生徒は、以下の条件を満たせば障害種を問わず使用することができます。						
1. なんらかの意思表示ができるレベルの児童生徒						
2. 姿勢と運動・動作が一時的でも改善する可能性のある児童生徒						
合計点数①+②+③					/100	
①体の健康						
		非常に	かなり	多少は	少しだけ	ほとんどない
Q1	授業で行った活動は、児童生徒の体の状態に適したものでしたか 「体の状態」とは、体温、体力、痛み等を含む体調のこと	5	4	3	2	1
Q2	児童生徒の姿勢と運動・動作が改善されましたか	5	4	3	2	1
Q3	児童生徒は生活管理に関する理解が深まりましたか 「生活管理」とは、生活リズム、食事、排泄、服薬、着替え、休息等を含む日常生活管理のこと	5	4	3	2	1
Q4	児童生徒は病気（障害）の状態の理解が深まりましたか	5	4	3	2	1
①「体の健康」合計点数					/35	
②心の健康						
Q5	児童生徒に肯定的な気分の変化はみられましたか 「肯定的な気分の変化」とは、笑顔、「快」の状態、リラックスした表情等から読み取れる気分の変化のこと	5	4	3	2	1
Q6	児童生徒は集中して学習活動に取り組みましたか	5	4	3	2	1
Q7	児童生徒の学習上の意欲は高まりましたか 「学習上の意欲」とは、新しいことを知る楽しさ、課題に対する達成感、「またやりたい」という期待感等の表出から読み取れるやる気のこと	5	4	3	2	1
Q8	児童生徒は、授業中起こりうる場所や場面の変化を理解し対応しましたか 「場所や場面の変化」とは、授業内容の変化、教室の変更、友人の不在等のこと	5	4	3	2	1
②「心の健康」合計点数					/35	
③社会生活機能						
Q9	児童生徒は、授業中に他者とのかわりもちましたか 「他者」とは、子ども同士、教師等、授業に関わった全ての人を含む	5	4	3	2	1
Q10	児童生徒は、授業中に適切なコミュニケーションの手段を選択し表現しましたか 「コミュニケーションの手段」とは、言語と全ての非言語的手段を含む	5	4	3	2	1
Q11	児童生徒は、授業のルールを理解し行動調整をしながら参加しましたか 「行動調整」とは、席を離れない、私語をしない、指示に従う等に加え教師が設定した授業のルールに沿った行動をすること	5	4	3	2	1
③「社会生活機能」の合計点数					/30	
採点方法	領域ごとの点数をたして、合計点数を算出してください。	5=10点、4=8点、3=6点、2=4点、1=2点とする。 ただし、Q1とQ5は、5=5点、4=4点、3=3点、2=2点、1=1点とする。				

IV. SNEAT の今後の課題

これまで、SNEAT の特徴や活用可能性、開発過程について報告してきた。SNEAT 開発にあたっては、より多くの専門家に意見を聞くことで理論的且つ実際現場で使用しやすい尺度になると考えた。構成概念の決定及び項目収集では、特別支援教育の研究者間での協議を行い。加えて、県教育研究機関の教員及び現職教員に対して内的妥当性の検証を行った。その結果、90%以上の教員が SNEAT の構成及び内容が妥当であると回答した。このことから、SNEAT の内容的妥当性が確認されたと考えられる。しかし、内容的妥当性は、回答者の主観的評価であることから、科学的な妥当性の検証は不十分である。今後、SNEAT を実際に教育現場での使用を通して、科学的に SNEAT の構成に関する妥当性を検証することが必要であろう。また、実際に使用する中で上がる問題点を検討し、改善することが必要であろう。

付記

調査にご協力いただいた沖縄県教育委員会の皆様、沖縄県立総合教育センター特別支援班の皆様、沖縄県の特別支援学校の先生方に心からお礼申し上げます。

文献

- 1) 野崎義和・川住隆一(2012) 「超重症児」該当児童生徒の指導において特別支援学校教師が抱える困難さと背景. 東北大学大学院教育学研究科研究年報, 60(2), 225-241.
- 2) 中央教育審議会初等中等教育分科会教育課程部会(2011) 児童生徒の学習評価の在り方について (報告) .
- 3) 小原愛子・權偕珍・韓昌完(2014) 病弱児への教育的対応とその教育成果検証ツールとしての健康関連 QOL の活用可能性について. *Asian Journal of Human Services*, 6, 59-71.

SHORT PAPER

Development of Scale to Special Needs Education Assessment Tool(SNEAT)

Changwan HAN¹⁾ Aiko KOHARA^{2) 3)} Masahiro KOHZUKI²⁾

1) University of the Ryukyus Faculty of Education

2) Tohoku University Graduate School of Medicine

3) Research Fellowship of the Japan Society for the Promotion of Science

ABSTRACT

In this paper, we reported the development process of Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT) including the structure, characteristics, scoring method and the possible use of SNEAT. It measures the outcomes of the classes for the students with special needs. The questionnaire was composed of three scopes such as physical functioning, mental health and social functioning and 11 question items. Because SNEAT intended to evaluate educational outcome based on the changes of children with disabilities with the five-point Likert scale, the SNEAT will help teachers set the educational goals of their classes. In the future, if the SNEAT needed to be scientifically verified and standardized, it would be widely used in Japan.

<Key-words>

Special Needs Education, Education Assessment, Special Needs Education Assessment Tool,
Development of Scale

hancw917@gmail.com (Changwan HAN)

Asian J Human Services, 2014, 7:125-134. © 2014 Asian Society of Human Services

Received

August 16,2014

Accepted

September 27,2014

Published

October 30,2014

Asian Journal of Human Services
VOL.7 October 2014

CONTENTS

ORIGINAL ARTICLES

The Managerial Tasks and Coping Strategies of Community Social Service Provider : The Case of Jeju National University Sorieoulim Music Mentoring Center.....	Junghee KIM, et al.	1
Effects of pointing movements on visuospatial working memory.....	Yuhei OI, et al.	16
Community Social Service and Public-Private Partnership.....	Youngaa RYOO	23
Non-Formal Education and Political Participation in Post-Socialist Countries.....	Hokeun YOO	38
Care Service Staff's Awareness of the Management of Undernutrition in Japan.....	Yuko FUJIO, et al.	51
The Development of the Special Needs Education Assessment Tool (SNEAT) to Evaluate the Educational Outcome of Special Needs Education : Centering on the Content Validity Verification.....	Aiko KOHARA, et al.	60
Identification of Actual States of Training for people with Intellectual Disabilities in Driving School : From Questionnaire Survey on Specific Driving School in Chiba and Okinawa	Atsushi TANAKA	72
The Theoretical analysis and consideration on the Corporate Social Responsibility(CSR) : Focus on Economic perspective	Moonjung KIM	86
An aim of the disaster prevention for safety live of the elderly requiring the long term care.....	Keiko KITAGAWA	100

REVIEW ARTICLE

Review of the Studies on Exercise Genomics.....	Jaeyong BYUN	116
---	---------------------	-----

SHORT PAPERS

Development of Scale to Special Needs Education Assessment Tool(SNEAT).....	Changwan HAN, et al.	125
The Current Situation and Issues of Education Centers' Information Provision regarding Special Needs Education : Information Provision via Websites.....	Kohei MORI, et al.	135

Published by
Asian Society of Human Services
Okinawa, Japan